

実践に“失敗”はない。そこにあるのは“成長”だ。

学力研青年部「実践工房SHIN」、神戸おもちやばー 中村 力

一、初任時代の失敗 ～カレー事件～

教師になって一年目。小さい頃から憧れていた教師という仕事に就き、期待に胸を膨らませながら、四年生を担任することになりました。その初めて担任したクラスの中に、何をしても僕に反発をしてくるA君がいました。A君は、休み時間にみんな遊びがあると、必ず誰かと取っ組み合いのけんかをして帰ってきました。そして、「〇〇殺す。許さん。」をただひたすらに連呼していました。僕が仲裁に入っても、目を吊り上げたまま、延々と「殺す。許さん。」を繰り返しました。興奮状態がおさまり、次の時間になっても、次の日になっても、相手にやり返してやろうと根に持っていました。初任者の僕にはそんなA君がなかなか理解できませんでした。勉強はよくできますし、発達障害とも違うような気がしていました。野球部で週末一日中しごかれて、お父さんもとても厳格な方だったので、それとA君

の性格とが影響しているのかと考えたところで、A君と僕の関係も良くなるわけではありませんでした。ある時には、帰りの会で友達に文句を言い始め、再び「殺す。許さん。」と言いだしたので、「そんなに友達を殺したいと言うなら、もう帰れ！」と、僕も感情的になって言い放ってしまいました。彼は飛び出すように家に帰っていききました。すぐにA君のお母さんに連絡を入れて、大きな事にはなりませんでしたが、彼の言動に毎日翻弄されて精神的に疲弊し、彼を理解し受けとめられていない自分の無力さも感じて、落ち込むばかりでした。そんなA君との関係性が変わるターニングポイントとなる出来事がありました。ある日の給食で、Aは給食当番をしていました。Aがおかずのカレーを配っていたときに、別の子が彼にぶつかって、Aのエプロンに大量のカレーがべっちよりついてしまいました。Aは興奮して、「殺す。許さん。」

とぶつかってきた子に殴りかかろうとしたので、別室に連れて行きました。そこで、彼のエプロンについていたカレーをふき取りながら、「熱かったなあ。やけどしてないか。これは怒ってしまうよなあ。」と言葉をかけました。すると、彼の怒りはすうっと静まってきました。Aは、「あいつがな、急にぶつかってきたな。」と話し始めたので、「そうかそうか。先生も見てたけど、Aはちゃんと配ってたよな。びつくりしたよな。」と受けとめました。相手の子がやって来てAに謝ると、Aも自分から「俺も見てなくてごめん。」とすぐに謝りました。僕が担任してから、キレたAがこんな短時間で仲直りをして、落ち着いたのは初めてでした。この経験から、子どもの言動の裏側にある思いをくみとることの大切さを学びました。表面的な激しい言動に振り回されないよう受け流しつつ、その奥にある本当の思いをしつかり受けとめて理解することで、Aのような子と関係を築くことができました。担任がそのような対応ができるようになると、クラスの周りの子どもたちも同じようにAを理解し対応できるようになりました。

した。三学期には、Aがキレたとしても、「先生、俺らにまかして。」と周りの友達がいさめてくれるようになりました。Aもそれを受け入れていました。自分の理解の枠を超える子どもたちと出会うと、翻弄されてしまうのですが、そんな出会いこそが、教師を成長させてくれるんだと思います。

この話には、後日談があります。つい先日、Aがいたクラスの同窓会がありました。そこで再会した二十歳のAはまるで別人でした。他の誰よりも爽やかで人当たりの良い好青年に成長していました。「先生に謝りたい。」と彼から言ってきた。「あの頃は、先生に反発してつっぱってました。」と当時を振り返って話をしてくれました。こんな子どもの成長に感動できる、教師の仕事はいいものだなと改めて感じた一幕でした。

二、理想のおしつけとイライラと

二年前に、六年生を担当しました。六年生は四回目だったにも関わらず、特別支援学級の担任を三年した後の、いきなりの六年生だったので、仕事の量やスピードに、四月は全くついていけませんでした。さらに追い打ちをかけるように、家では一歳の

双子が病気がちで入院をくり返しており、共働きの妻と交代で休みをとりながらの生活でした。自分自身に全く余裕がありませんでした。それにも関わらず、目の前の六年生には、自分の理想をおしつけ、思うように反応しない子どもたちに対して勝手にイライラしていたのです。そうすると、負

のスパイラルにはまります。大した準備もできていない↓子どもはノッてこない↓担任一人イライラする↓子どもとの関係が悪くなる↓何をやってもノッてこない↓↓自分と余裕がないにも関わらず、「素晴らしいクラスをつくらなければいけない！」という理想に囚われていた僕は、焦りと不安しかありませんでした。周りのクラスと比べて、また落ち込んでいました。自分のせいで、クラスの雰囲気悪くしてしまい、特に数人の女子とは関係が悪く、僕も彼等達の態度にイライラする毎日でした。

そんな自分の過ちに気づかせてもらったのは、卒業式の後でした。卒業式が終わる、教室にもどろうとすると、僕に反発していた女の子達がこそっと何かをしていた様子で、教室から出ていくのを見えました。不

思議に思いながら教室に入ると、そこには黒板一杯に描かれた素敵な絵とともに「先生大好き」というメッセージが書かれていました。僕は彼女達の思いを受けとめることをせずに、僕の方から勝手に壁を作っていたことに「今更」気づいたので。

子どもは教師の鏡であることを、彼女達から改めて教えてもらいました。彼女達が反発していたのは、教師の僕自身にその種があつたのです。きつとイライラした表情や余裕のない雰囲気子どもに伝わっていたのです。彼女達から教わったことを活かして、この次の年度では、教師自身が上機嫌でいることと、学級の雰囲気づくりを何より大切にしました。すると、想像以上の効果があることをはつきりと実感しました。

三、困難は、それを乗り越えられる者だけにおとずれる。

僕はこの言葉が大好きです。成功の反対は失敗ではありません。「成長」です。うまく対応できず迷惑をかけた子どもたちには人一倍の感謝の気持ちを抱いています。教師として成長し続けることで、恩返し、いえ「恩送り」をしていきます。